

# Exuberant Observations : Approaches to Nature by the Royal Society and Sir Thomas Browne

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/4415">http://hdl.handle.net/2297/4415</a>

## 氾濫する Observation

### ——王立協会とサー・トマス・ブラウンにおける自然研究——<sup>1</sup>

生 田 省 悟

はじめに—“Nature”として“Observation”——

多文化共生がある種の標語として提唱されてすでに久しい。しかしながら、一見心地よさそうに思われるその言葉とは裏腹に、異なる文化を理解することの困難さは誰もがおりにふれて実感するところであろう。卑近な事例を挙げるとすると、たとえば「自然」という言葉がある。言うまでもなく、環境問題という深刻な事態ともあいまって、現在、自然をどう捉えるか、ひいては自然とは何を表象するものなのかについて、さまざまな視座からの議論が錯綜している。実際、私たち日本人同士が自然について論じ合うときであつても、たがいの用いる「自然」自体やイメージにしばしば差異が潜んでいるため、議論がいつこうに深まらないことさえある。まして、異なる風土や文化を背景とした場合、(そもそも西欧文化の所産であることを認めた上で、「自然」という語を用い続けるなら)、「自然」が孕む意味の多義性に起因する齟齬や誤解が生じてしまうのはやむをえない事態なのかもしれない。それぞれの地域や場所、あるいは時代において「自然」は人々の生活感と呼応しつつ、まさに固有の様態で脈うち、息づいているからだ。

英語圏だけに限ってみても、「自然」が日本語の語彙に加わる原因となった“nature”に重層的な意味があることは早くから指摘されているところだし、直接の語源であるラテン語の *natura*、さらにはその背後のギリシャ語 *physis*

sis)に関する知識を介して、私たちもある程度はそうした重層性について承知している。ところが、おそらくは最も日常的な用法と了解されうるもの、すなわち「物理的に存在する自然界、とりわけて人間の文明が創り出したものと対比され、人間が直接的に接触する地球上の事物や現象」という意味を明確な形で担うようになったのが近代以降、それも十七世紀中葉を迎えてからだという事実は意外なほど見落とされてしまっている。<sup>2</sup> だとすれば、〈自然〉が人間の構築した概念であり言葉である以上、そうした用法が成立する状況の検証を試みることはイギリス社会と文化の歴史的局面の一部を再確認する行為となるだろうし、今日の英語圏、ひいては欧米文化圏における自然認識の根幹とつながっているはずの問題に肉薄できるのではないか。その試みは同時に、私たちが、私たち自身の生きる場所と文化の脈絡において〈自然〉を再確認する契機になるのではないかとも思われる。

以上をふまえ、本稿は、近代的な自然理解の鍵とみなされたはずの“observation”という語に注目し、十七世紀の人々がそれに何を託したのかを考察することにより、〈自然〉に負荷されたひとつの意味が文化のうちに組み込まれてゆく様態を探るものである。自然に関わる新たな認識が、自覚された行為としての“observation”を紹介することで明確に意識され、確立されるにいたったと言えるからだ。その際、一六六二年、国王によって設立が正式に認可された王立協会 (The Royal Society of London for the Improving of Natural Knowledge) およびサー・トマス・ブラウン (Sir Thomas Browne, 1605-82) の営みが有力な手がかりとなる。

## 王立協会のアイデンティティ

トマス・スプラットが一六六七年に著した『王立協会史』 (The History of the Royal Society of London for the Improving of Natural Knowledge) は十七世紀の自然学をめぐる動向を考察するのに不可欠の文献であるが、この著作は、王立協会の設立、目的、活動、意義を露骨なまでに喧伝し続けている。その意味からすれば、『王立協会

史』は単なる事実の羅列であるにとどまりはしない。むしろ何らかの作為、すなわち自らの立場を擁護する目的から、理想化、正当化の意識が強く働いていることは容易に想像される。そのため、「事実に関わる記録であると同時に信仰告白でもある」とみなされたりもする<sup>3</sup>。しかしながら、この著作が王立協会によって公認されたという事実を考慮するとき、主張の力点が多岐にわたる内容のどこに置かれているのかを検討することが重要な課題となってくる。

『王立協会史』の特徴として挙げられるものに、何よりもまず強烈なナショナリズムがある。正式名称に含まれる「自然に関わる知識の改革」を字義とおりの標語として、王立協会は古典期以来続く知の伝統からの脱却をはかるとともに、他国にさきがけて、新たな知の構築をめざす。「王立協会を世界共通の銀行、自由港とする」<sup>4</sup>(64)とか「イングランドが他のヨーロッパ諸国にぬきんでて、学問の同盟国の首領となることを正当に主張する」(113)といった文言は、自らの自己同一性を確認するための道具に等しかった。そして、ギリシャ・ローマへの言及、あるいはフランス、オランダなど、国力や学問領域において競争関係にあった近隣諸国との対比の過程で浮上してくるのが、あの「わが国を実験に基づく知識の祖国とする」という有名な宣言を含む一節に他ならない。

したがって、わが国の気候風土のありよう、空気、天空の影響、イングランド人の血のなりたち、そしてまた四方を海に囲まれた状況が王立協会の精励とあいまって、わが国を実験に基づく知識の祖国とするように思われる。また、このことは、自然が他国の人々よりもイングランド人に対してその秘密を明らかにしてくれることよき兆候なのである。なぜなら自然は、その神秘を受け入れ、心に保持し続けるために必要とされる、みごとに均整のとれた才をすでに彼らに授けているのだから。(115-6)

このようなナショナリズムを補強するものとして、『王立協会史』が歴史の必要性を訴えていることも見逃せない。国家が国家としての自己同一性を希求するとき、エリザベス朝のウィリアム・キヤムデンによる『ブリタニア』(Britannia, 1586)がそうだったように、歴史を創り上げることがしばしば求められる。スプラットもまた、「内乱の歴史」——内乱期は王立協会の前身が創成された時期にあたる——編纂の必要性を指摘し、「国家の歴史」(“Civil History”)の執筆とは「ほとんどすべての文明国にあって、(国家形成の)最終段階において遂行されてきたもの」(43)と述べている。そして、そのような歴史の編纂こそが、内乱を経てようやく訪れた王政復古期における「わが国の安寧と国王の利益に大いに寄与するであろう」(44)と断言してはばからない。だとすれば、スプラットには、時代に必要とされる歴史書の役割を『王立協会史』それ自体に担わせようとのもくろみがあったと推測できるかもしれない。

政治的な意図を孕む宣言として「実験に基づく知識の祖国」を標榜すること、常識的に言って、それは実験に基づく知識とは呼べないものの排除を含蓄する。そして、自然にまつわる知との関連から見れば、排除されるべき直接の領域とは、過去から続く博物誌の系譜に他ならなかった。後に詳述するが、この時代の人々は博物誌の伝統がはたして確固たる根拠に基づいていたのであろうか、との問いをしきりに発する。王立協会の方向性に強い影響を与えたフランシス・ベイコンがあえて「すべての自然学の基盤こそ博物誌である」(『学問の進歩』)と強調したのも、旧来の方法論に対する懐疑の現われといった側面を帯びていたはずだ。<sup>5</sup> スプラット自身もベイコンの言葉を継承しつつ、「真の自然学」、「自然に関する正しい記述」の意義について明言するのを忘れてはいない。スプラットは、「博物誌」が「国家の歴史」の一翼をにないつつ、イングランドの独自性、ひいてはナショナリズムに寄与することを提唱して、次のように語りかける。

プリニウス、アリストテレス、ソリヌス、アエリアヌスの記述は冷静で実り豊かな陳述というよりは、気のきいた話、優れて怪異な物語に満ちている。彼らは石や鉱物の途方もない性質、その時代の珍奇な品々、動物の食料、色、姿形、あるいは泉や川の効能を収集しさえすれば、博物誌の主要な役割をはたしたと思ひ込んだ。だが、この方向はおおいに腐敗を被りやすいのである。自然を忠実にたどってはいないのだ。というのも、無知に基づく私たちの驚嘆をよそに、自然はたえず確実な道程を歩んでいるし、途方もないものでもありえず、極端に手を加えて何かを創り出しはしないからである。彼らの方向はまた、とりわけ欺瞞に陥りやすいものである。というのも、そうした方向により、人々は真理を大いに歪めたり、まことしやかな所見を掲げがちになるからだ。それは探求の厳格な歩みを停止させる。精神を汚染し、精神を真の自然学からそむけさせる。それは真の記述の点から見れば、空想譚のようなものであり、種々の途方もないできごとや驚くべき状況を増殖させることで、真の記述を退屈で味気ないものにしてみせる。また、これ以上は言うことを控えるが、それが喚起する喜びは決して堅固なものではない。空想が与える満足感と同じく、はじめのうちは私たちの心を少しは動かすものの、すぐに飽きさせ、うんざりさせてしまう。ところが、自然に関する正しい記述は理性の喜び同様に、おそらくは刺激的でも強烈でもないであろうが、それが与える満足感において、はるかに長く持続するものなのである。(90-1)

一読して明らかなおとおり、この一節が訴えるのは過去の権威との断絶、そして真の博物誌の必要性であるが、その主張が両者の相違を際立たせるような用語の数々によって行なわれているのは注目に値する。王立協会の採用した露骨な戦略のひとつとして、誤謬、虚偽、無知といった概念を意図的に利用している事実が浮上するからだ。

王立協会の戦略——“ignis fatuus”と“observation”——

筆者はかつて「誤解を恐れずに言えば、十七世紀は誤謬の時代である」と述べたことがある。<sup>6</sup> 詳細については省略するが、その主要な根拠としては、“ignis fatuus”あるいはその類語“Jack-a-lantern,” “will-o'-the-wisp”などがこの時代の中葉に頻出することが挙げられる。「誤謬への導き」を表象するトポス、もはや存在することが許されないがゆえに意義を認められたトポス、という逆説的な性格を帯びつつ、“ignis fatuus”が多様な局面で出現してくるのだ。たとえば、ミルトンが『楽園喪失』(9:631-45)において蛇に誘惑されたエヴァを語るおり、「さまざまの炎」(“wandering fire”)なる自然現象を説明してみせたように、“ignis fatuus”は本来的には迷信と結びつきながら、人間を惑わし、誤った方向へ導く「鬼火」と理解されていた。ところが、それはこの時代に敷衍され、内なる光としての理性を行使することを忘れさせるもの、さらには誤謬へと導いてゆくものを表象するトポスへと転位していったのである。

たとえば、知をめぐる文脈に即した事情を探るとすると、ベイコンが『学問の進歩』においてスコラ哲学を「学問のクモの巣」(“cobwebs of learning”)と呼んだのは周知の事実だが(285)、彼の秘書を務めた経歴をもつトマス・ホップスの場合はより過激だった。彼はローマ教会批判とつなげて、こう述べている。

最後になるが、アリストテレスの形而上学、倫理学、政治学、またスコラ学派の些細な区別だて、野蛮な用語、曖昧な言語など、諸大学(それらはすべて、法王の権力により設立され、支配されてきた)で教授されるものは、これらの誤謬が看破されないようにするのに役立つばかりか、空虚な学問の鬼火(“the Ignis Fatuus of Vain Philosophy”)を福音の光と思い込ませるのにも役立っている。<sup>7</sup>

跋扈する“*ignis fatuus*”とそれに対する強烈な反応はそのまま、王立協会が行なった過去の権威との断絶宣言、および新たな学問の要請の背景をなしていたのだった。すなわち、このトポスには二重の機能が求められたのであって、ひとつは純粹に旧来の学問に対する異議申し立ての根拠として、他方は十七世紀の方向を正当化するための仕かけとしてである。そして、時代のこのような趨勢を敏感に反映するばかりか、むしろ積極的に擁護すべき役割を付与された具体例を、ジョン・ドライデンの作品、「畏友チャールトン博士に」に見出すことができる。ウオルター・チャールトンはチャールズ二世の侍医で、王立協会設立当初からの会員でもあった。この詩は、彼が一六六三年、ストーンヘンジの古代デー人族建立説を唱えたことを祝して書かれたものである。当時、ドライデン自身も王立協会会員だったことをも考慮すれば、この詩の論旨はより明確に感知されるはずだ。詩人は、本来自由であるべき理性を拘束してきたアリストテレス一派の権威失墜の過程を述べ、ひいてはベイコンによって理性と真理が誤謬から解放された歓びを高らかに謳う。

最も長く支配権をふるった専制にあつては

われらの祖先が彼らの自由に生まれついた理性を

かのスタギラの男に譲り渡してしまい、

彼の掲げる松明を普遍の光とみなすにいたった。

そのため真理は、ただ一人が国家を代表する間に、

珍奇かつ高価なものとなる一方で劣悪化の途をたどり、

ついには華々しい商品あるいは護符のごとくに購われ、



硬直した言葉にはアリストテレスの紋章が刻印されたのだ。

(中略)

自由な理性の大義を提唱する者のうち、イングランド人はその価値と榮譽において決して最低の位置を占めはしない。

単に現在の知識ばかりか、その未来をも

世界はベイコンに負っているのである。

(124)

理性という「普遍の光」とすり替わった「スタギラの男(アリストテレス)」の「掲げる松明」とは、人を欺くという意味において“*ignis fatuus*”のまぎれもない変種である。一方、それと対置されたベイコンの賛美には何のためらいもない。ちなみにドライデンはこれらの詩行に続けて、ベイコンの同時代人ギルバート、あるいは現存のボイル、ハーヴェイといった王立協会員かつ著名な自然研究者、さらにはチャールトンその人の業績を誇らしげに語ってやまない。『王立協会史』に先立つこと四年、“*ignis fatuus*”のほの暗い光はドライデンの作品を通じて、「実験に基づく知の祖国」の孕む政治性をきわだたせるよう奉仕させられていたのだった。

“*ignis fatuus*”を巧妙に利用することで企てられた過去の権威すなわち欺瞞・誤謬からの脱却、また、新たな真の自然学の確立という壮大な目標は、現実としてどのように達成されるのか。端的に言う、その手法は“*observation*”に求められた。ここで、「博物誌」を話題としたスプラットの議論(90-1)を思い出さなければならぬ。その一節における論点は「所見」、「記述」の性格に他ならず、「まことしやかな所見」(“*specious Observation*”)が、たとえば「自然に関する正しい記述」(“*a just History of Nature*”)と激しく対立させられているのである。したがって、スプラットの議論は結局、“*observation*”の意義に収斂してゆく。言うまでもなく、“*observation*”とは

対象を観察すること、また、それに基づく所見を記載することを意味する。ちなみに（後に触れるが）広義の意味からすれば、アリストテレス以来の博物誌の系譜も“observation”の範疇に含まれる。だが、王立協会の主張において重要なのは、「まことしやかな」という形容詞の有無が決定的な差異をもたらすということだ。その峻別は、王立協会が自らの立場を正当化するためばかりか、自己同一性を保証するためにも不可欠の過程となる。だからこそ、対象と向き合う際の厳密さ、理性と常識に即した合理性、要するに科学的整合性が、修飾語句をいっさい必要としない“observation”に負荷されなければならなかったのである。<sup>10</sup>

「まことしやかな」という形容詞を脱ぎ捨てた“observation”は「観察」は「実験に基づく知識の祖国」にあつては実験それ自体を補完するばかりか、予断を排除して対象や現象を凝視するという点で、その根拠であるところらみなされた。だからこそ、スプラットは「観察、それは知識の偉大なる基盤である」（20）と宣言してはばかることがない。このとき、あの「すべての自然学の基盤こそ博物誌である」というベイコンの主張はスプラットによる「観察」の意義づけと矛盾なく結びつくはずであるし、「観察」という行為を介してはじめて具体的な形を帯びる。こうした一連の図式を根拠としながら、「観察」は王立協会によつて、科学立国を標榜するための戦略のうちに完全に組み込まれたのである。

権威への盲目的な追従や、それにとまなう誤った理解・誤謬に対する意義申立て、さらには新たななる知の構築への試みといった、「自然」をめぐる時代の趨勢を背景として、“observation”は各種の言説や記録文書に氾濫する。その様相は、「実験に基づく知識の祖国」が、実は“observation”の強権支配にしたがう一大帝国であったとさえ言えるほどだ。スプラット自身、王立協会による活動の実践例を挙げる際にはこの言葉を反復しているが（156-7）、ここではより詳細かつ網羅的な文書、すなわちトマス・バーチによるもうひとつの『王立協会史』から、一六六四年一〇月一九日付け会合記録の一部を引いておこう。話題は気圧測定のための水銀柱、そして太陽の形状につ

いてである。

これに関して、議長は自身もボイル氏と同様に、水銀が二九インチ以下だったのに気づいたと述べた。ただし、水銀がそれほどまでに低くなることをボイル氏が観察したのと同じ日の出来事だったかどうかについては記憶がなかった。

ボイル氏は、自身の観察するところによれば、水銀が降下した際、雨もようの天候が訪れたと述べた。

ポール・ニール卿は、ホワイトホールとグリニッジにおいて、日の出と日の入りの時刻に太陽の形状を観察すべきであるという、以前の提案を再度行なった。ロバート・モレイ卿に対して、ホワイトホールでそれらを観察するとともにグリニッジにおける観察をマー氏に依頼してほしい旨の要請があった。卿はそうのようにすると約束した。<sup>11</sup>

ここでは、記載内容の質ではなく、〈観察〉という言葉がおそらくは無意識のうちに、ごく当然の用語として繰り返されている事に注目したい。これを、〈観察〉の日常化と呼んでもさしつかえないだろう。

新たな知を求める際の手法として、〈観察〉が人々の間にいかに浸透していったかを示す事例は、やや時代は下るが、ジョン・レイの著作『創造の御業に現われたる神の叡智』(The Wisdom of God Manifested in the Works of the Creation, 1691) の一節にも見出すことができる。<sup>12</sup> レイは鳥が消化行為の一助として小石を飲み込む現象をめぐって、次のように所見を述べている。

また私は、家で飼われているために小石をえられない鳥の場合、自由に外を飛びまわる鳥と較べて、卵黄自体の色が変わってしまうこと、それも大層淡い色になってしまうことを観察した。

さらに私自身が観察したところでは、多くの鳥の場合、食道が砂囊につながる直前に拡張し、厚みを増している…。(130)

この一節は、〈観察〉が研究者レイの根幹をなしていた事態を反映している。

レイが王立協会員であったことと関連づけるとすると、彼の著作からはこの時代の精神を具現するにちがいない発言が散見される。たとえば、言葉としては明記しないものの、レイが〈観察〉の意義と内実を的確にあとづけた箇所がある。

書物で知識を身につけたり、他人が書いたものを読んだり、真理よりも虚偽に信頼をおいたりすれば、それでことたりると思うべきではない。むしろ、機会に恵まれる限り、私たち自身が事物を検証し、書物同様に自然とも会話を行なおうではないか。いくら励んだところで、先人の考案したものに何も付け加えることはないとか、彼らの誤りを矯正できないなどと考えたりして、私たち自身の才能に不信を抱いたり、私たち自身の能力に絶望したりするのは止めようではないか。むしろ、この自然に関する知識を奨励し、増大させること、また、新たな発見を行なうことに努めようではないか。科学の境界はヘラクレスの柱のごとくに定められていて、「これより先はなし」と刻まれているなどと考えるはならない。先人が伝えることを学べば、それでことが終わるなどと考えるはならない。自然という宝庫は無尽蔵なのだ。<sup>13</sup> (172)

既存の権威に依拠するのではなく、自らの眼でつぶさに観察し、得られた結果について所見を述べる。そして、自らの手で新たな知の構築を試みる。レイの見解が王立協会の基本的姿勢を正しく反映しているのは疑うべくもないが、この一節からは、ふたつのことをさらに読み取る必要がある。

ひとつは、“observation”の語義に関わるものである。周知のように、この言葉には「観察・所見」の他に、「ある規則や権威に従うこと、あるいはそれらを遵守すること」という意味もある。だとすると、たとえば「アリス・トテレスが観察しているように」とか「プリニウスの観察・所見によれば」という場合、そこにある種の権威づけの意識が働いてしまうことは否定できなくなる。王立協会の精神を具現しようとする人々はこの言葉の危うさを十分に認識した上で、「まことしやかな」を欠いた「観察・所見」の実践に精励する意義を掲げなければならなかった。レイの探求心の根幹にはこのような意識が潜んでいたと考えられる。

もうひとつは、“observation”が内包する事態、すなわち人間と自然という二分法に関わっている。「自然とも会話を行なおう」、あるいは「自然という宝庫は無尽蔵なのだ」というレイの言葉からは、最初に指摘したことはあるが、今日のもっとも日常的な意味とされる「自然」がすでに定着していた事態を確実に読み取ることができる。だが、それに劣らず注目すべきなのは、レイが「観察」における主体としての人間に絶対の信頼を置いていることに他ならない。人間が正しく理性を行使すれば、自然に関する新たな知を発見し、蓄積できるというのだ。「見る主体」と「見られる客体」、すなわち「観察者」である人間と「観察対象」である自然との区分がこうして、レイにあつては自明の前提として想定されている。その際、レイの認識の根拠は言うまでもなく、“observation”にあつた。人間と他者としての自然という概念が“observation”と交錯しあつて、というよりはむしろ、“observation”の意義が徹底したことによって形成された結果を、この一節は具現しているのである。新たな地平を

模索する自然研究の方向と人間対自然の二分法とが解きがたく結びつくことで、近代の自然観は構築されてゆく。レイの主張は「自然」を文化のうちに定位する試みに等しかった。

### ブラウンの『伝染性謬見』

王立協会の掲げる目標は時代の脈絡とは無縁ではありえない。すでに触れたようにベイコンの多大な影響も受けていたし、当時の大陸諸国において出現した自然にまつわる新たな発見や所見も背景をなしていたとすれば、王立協会は知をめぐるきわめて動的な状況の産物に他ならなかった。この十七世紀中葉という時期を考えると、きわめて興味深い事例として、ひとりの人物が浮上する。類を見ないほどの文体を駆使したことから、イギリス文学史上に特異な位置を占める文人かつ医師、サー・トマス・ブラウンである。また、ブラウンは博物誌研究に情熱を傾けた人物でもあった。そうした側面から見ても、彼の活動に注目すべき理由が存在する。ブラウンが、王立協会の掲げるところとほぼ同質の意識を抱え込み、独力で課題に取り組んだと思われるからだ。ブラウンを検証し、その足跡をたどることは、十七世紀の時代精神と文化のありようと関わる状況をつぶさに目撃できるという可能性を宿してさえいる。

彼の関心のありかはすでに、刊行された最初の著作、『医師の信仰』(Religio Medici, 1642)の随所に示されている。一例のみを紹介するとすれば、第一部二三節が挙げられる。

私の慎ましい思弁にはもうひとつの道がある。それは、神が被造物に残された徴と自然の明白な力の跡を尋ねたり見出したりして満足を覚えることである。これらの神秘を深く探ったとしても、何の危険もあるはずがない。学問に至聖所は存在しないのだ。この世界が創られたのは、獣たちにとっては棲み処となるためであった

が、私たち人間にとっては研究と考察の対象としてであった。これは理性を神に負っているからであり、私たちは獣ではなかったことに感謝し、神に敬意を表さなければならぬ。理性がなければ、世界はまだまだ存在しなかったも同然であろうし、あるいは世界があると考えたり話したりする被造物の生まれなかった、天地創造の第六日以前そのままであったにちがいない。周囲をやみくもに眺め、いちじるしく粗野な言葉で神の御業を褒めそやすたぐいの愚かな頭腦の持ち主に、神の叡智を賞賛できるはずがあるうか。神の行為を正しく探求し、被造物を慎重に検証することを通し、敬虔にして学識あふれる賛美を捧げるといふ責務をはたす者こそ、みごとくに神の栄光を称えるのである。(1:22)

〈被造物の書〉をつうじて「神の叡智」(“wisdom of God”)を推しはかるといふのは、キリスト教社会において、自然学、博物誌の根拠とされるものであり、ブラウンの姿勢に別段目新しい点は見られない。<sup>14</sup>ここではむしろ、ブラウンの決意の向かうところを汲みとる必要がある。天地創造が「私たち人間にとっては研究と考察の対象としてであった」とか「神の行為を正しく探求し、被造物を慎重に検証することを通し、敬虔にして学識あふれる賛美を捧げるといふ責務をはたす」とかいった箇所に表示されているのは、〈観察〉の意義を積極的に評価し、それを自らの手法とする覚悟ではなかったらうか。

ブラウンによる、『医師の信仰』の記述を踏まえた博物誌研究の実践には、ふたつの核となる領域があった。そのひとつを大著『伝染性謬見』(*Pseudodoxia Epidemica*, 1646)に求めることができる。副題に明示されるとともに、本文に先立つ「読者諸賢に」でさまざまな角度から繰り返されているように、本書の執筆の意図は「一般に広く受け入れられ、真理だと思われてしまった見解」を摘出し、それに反駁を試みることにあった。<sup>15</sup>一六七二年にいたるまで増補改訂が繰り返された事実からして、本書はブラウンの営みの集大成と評価されるだろうし、

また、誤謬を“*Ignis fatuus*”に置きかえるならば、『伝染性謬見』は“*Ignis fatuus*”と“*observation*”とのせめぎ合いに関する克明な記録とも読むことができる。その意味からすれば、たとえ「孤独な、孤立無援の努力」(2:3)との告白があるにしても、ブラウンが時代の趨勢と呼応していたことさえみてとれる。それを示唆する例としては、たとえば、ベイコンとの関係がある。ブラウンが「学問の進歩」という言葉を二度用いた点(2:6, 28)をはじめ、本書がベイコンの強い影響下にある点についてはすでに指摘されているため、ここでは立ち入らないでおく。ただ、ベイコンは『学問の進歩』において、「民間に流布する誤謬の一覧表」作成の必要性を述べ、とりわけ、それを「言葉としても見解としても通用してはいるが、それにもかかわらず、真実でないことが明らかに推測されたり、断罪される博物誌」の領域に求めたことがあった(364)。だとすると、ベイコンの提起をブラウンが正面から受け止めた可能性は大いにありうる。さらに、ラテン語ではなく英語で執筆した点について、「私たちの祖国、しかも、とりわけて賢明なる郷紳階級の方々に捧げられる」(2:4)という発言は、王立協会のナシヨナリズムとどこかでつながっていたのではなかったか。

いずれにしても、全七巻のうち、誤謬の原因を列挙するという、いわば誤謬の百科全書の様相を呈した第一巻について、第二巻と第三巻では博物誌に関する話題が組上にのぼる。なかでも動物を取り上げた第三巻の議論は熱を帯び、ときに錯綜し、迷走してしまう。しかしながら、博引傍証の限りをつくし、複雑に入り組む文章を解きほぐす過程で、第三巻、ひいては『伝染性謬見』全巻を貫く議論の輪郭と方向性がしだいに浮かび上がってくる。ブラウンは戦略として「権威、感覚、理性、すなわち真理の三つの決定因」(2:170)を標榜し、ひたすらこれに固執するのだ。王立協会をめぐる議論を踏まえると、権威を強調する姿勢には違和感を覚えるかもしれないが、それは正しくない。むしろ、この点にこそブラウンの独自性が見出されるからだ。論駁されるべき「観察」を述べた過去の権威は別としても、ブラウンは先行する「所見」を自らの感覚と理性に照し合わせつつ、むしろ



積極的に活用し、最新の情報を検索する。要するに、ブラウンは複数の<sup>オブザベーション</sup>へ所見<sup>オブザベーション</sup>を対象にへ観察<sup>オブザベーション</sup>を行ない、それらの適否を探つてゆくのだ。その意味で、第三巻においては王立協会の場合と同質の、へ観察<sup>オブザベーション</sup>に対する絶対的な信頼が作用している。そして、それを支えるのが理性と感覚（常識<sup>センス</sup>）に他ならなかった。

全二八章からなる第三巻の冒頭は、「象について」である。象は古くからヨーロッパではよく知られており、しばしば博物誌で扱われた他、寓意の素材ともされてきた動物である。ただ、ここで注目すべきなのは、ブラウンが第三巻の議論を象ではじめた意図のありかのほうだ。それは、あのプリニウスの『博物誌』を意識した、すなわち象が「動物篇」の冒頭に置かれたことを意識した行為ではなかったか。実際、『伝染性謬見』にあつては、プリニウスが誤謬の元凶として糾弾されているのだが、ブラウンが象をまず取り上げたこと自体、プリニウス解体の試みをひそかに宣言したものとみなすことができるのだ。

「象について」を語るブラウンは、過去の博物誌の常套とされたあの雑多な記述とは一線を画し、論点を絞る。<sup>17</sup>議論の構成基盤が旧来の博物誌批判である以上、それらとは異なる手法を採用することが必要であつたと同時に、記述の質的な差異を明確にしなければならなかったのだ。題材の主旨は、アリストテレス『動物進行論』（709a10）に起因するへ象には関節がない。したがって、この動物は横たわることができず、木に寄りかかつて眠るというものである。これが近年に生じたのではなく、歴史を引きずっており、正気を失った人々が無批判に受け入れてきた謬見だと、ブラウンは言う。そして、この誤謬が流布する原因を作つた著作家たちを列挙し、順に反論を試みてゆく。詳細については割愛するが、ブラウンは理性に照らしつつ、「曲がらない体が動くのは、ヘラクレスの柱が駆け出すのと同じ」だとか、ガレノスの説（権威）に依拠しつつ、「直立状態では肉体の緊張が持続され、休息とは言えない」だとか述べて、ひたすら論理的であろうとする。さらには、かつて象がインゲランド各地を巡回したおり、ひざまづいたり横たわつたりしたことが目撃されたと指摘する。そして、いくつか補足

説明を行なった後、ブラウンは結論を下す。

象の関節が他のほとんどの四足獣とは異なる形で構成され、いずれの獣の場合よりも不明瞭で精妙さに欠けると主張するのであれば、それは真理を損ないはしない。だが、質の劣った話から絶対の真実を導き出そうとの意図に基づき、象には関節がないと言い張るのであれば、それは理性から非難を浴びるだろうし、感覚との矛盾も避けられないだろう。(2:160)

こうして、ブラウンは誤謬をもたらした過去の〈所見〉を多角的に検証し、自らの常識センスにかなう〈所見〉にいたろうとする。

しかしながら、先に述べたようにブラウンの論議は必ずしも首尾一貫したものばかりではなく、逸脱してしまう場合もしばしば見受けられる。その理由は容易には判別しがたい。ただ、確実に言えるのは、彼の議論があらゆる可能性をくまなく検証せずにはいられない切迫感を漂わせていることだ。ブラウンには、論証の過程で読者に訴えかけることを忘れ、あたかも自らに説いてきかせるかのように精魂を傾ける瞬間があった。たとえば「不死鳥」の存在を否定する第二章にあつては、アダムⅡ両性具有説等、議論が途中で混乱を生じてしまうのだが、再び本題に戻ろうとする際、そこに出現する「…以上」(“since”)の執拗な反復をどのように解釈すべきなのか。

したがって、私たちには不死鳥の存在を確認するのにかくも薄弱な根拠しかない以上、眼で見たという証言がない以上、すでに断言したとおり、この話が由来する源となった著作家たちによって、むしろ否定されている以上、この問題を真剣に語ってきた人々が否定的に、対立的に、あるいは事実と矛盾するといった形式で言

明している以上、また他の多くの人々も詩的に、修辭的に、謎めいた形で、あるいは象徴的に書いているため、彼らをこの論争に引き込むことができない以上、たとえその実在を認めるような聖書の記述であっても、正しく熟考すれば、その実在を積極的に押し進めるものではなくなる以上、そして最後に、そのような不可思議な発生、単一性、長命を実験と理性とが確認できない以上、この伝承にどれほど依存すべきかを私たちは熟慮に委ねるのである。(2:190)

熱を帯びた口調は、いわゆる帰納法への傾斜だけからでは説明不能だろう。権威とされる文献を渉獵し、理性と感覚がうなずくまで、ブラウンはさまざまな方角に視線を向けることをやめようとはしない。しかも確信犯的に、である。それを裏書きするのが「:以上」という接続詞であり、これを、『伝染性謬見』の主要な鍵語とみなすことができる。ブラウンは「読者諸賢に」で、「私たちはこの迷宮において、開けた地も普遍の導きも見出せず、しばしばアメリカ、すなわち真理の踏みならされていない領域をやむなくさまよう」(2:5)と告白したが、事実、掲げられた誤謬排除の目的と同時に、知の快楽を求めてさまようのである。多岐にわたる対象のそれぞれを「観察」し、曖昧さを除去し、事実に向ふという意義において、ブラウンは近代博物誌の根幹に関わる“observation”の機能を自覚し、その実践に努めたのだった。

### ブラウンの覚え書き

『伝染性謬見』は“observation”と“ignis fauus”との抗争を記録する誤謬の博物誌とも位置づけられるが、その一方で、ブラウンの博物誌研究にはもうひとつの核と呼べるものが存在していた。その痕跡を、彼が日常の研究過程で記したと思われる覚え書き、備忘録の類からたどることができる。<sup>18</sup> いわば、もうひとりのブラウンが存在

していたのだ。多くが断片的なものでありながら、そうした記録にあつては、誤謬に対する異議申し立ては影をひそめ、むしろへ自然と直接的に対峙し、眼に映る実態を探求しようとする姿勢が浮かび上がってくる。それらのなかから、ブラウンにおける“observation”認識の証しとなるものを探ろうとすると、たとえば次のような一節にゆきあたる。

野ウサギや雌ジカなど、恐怖心を抱きがちな動物においては物体がより大きく映るよう、眼球の水晶体が膨張しているか否かを観察すること。私たちの見るところ、野ウサギの場合、それは事実である。ハツカネズミや雄ジカについても観察せよ。フクロウやネコにおいても、このことを観察せよ……。 (3:367-8)

医師であることを割り引いたとしても、ここからは、ブラウンが“observation”の実践に勤しむとともに、その言葉の意義と機能を信頼し、活用していることが判明する。

あるいは、「象に関する所見」と題する短い一文がある。『伝染性謬見』執筆のための準備として書かれたのか否かは不明であるが、おそらくはどこかで飼育されていた象の観察を踏まえた<sup>19</sup>と推測されるものである。『伝染性謬見』の場合とははなはだしく異なり、ここでは、象の部位や器官をめぐる記述が淡々と行なわれる。一部、雌の牙をめぐる<sup>19</sup>はアリストテレスに準拠し、不正確な点が見受けられるものの、ブラウンの考察はおおむね適切である。とりわけ注目すべきなのは、習性ひいては生態の領域に入りかけていることだ。

象はときどき水辺へ赴き、そして泳ぐ。それにより気分転換をはたし、固く乾いた皮膚をしなやかにさせるし、

また鼻で水を吸い込んで、全身に吹きかけ、皮膚に湿りけを与えようとする。皮膚はざらついで固く、あたたかも溝を彫られてようであり、固くて粗いなめし皮のような感触がある。(3:350)

習性や生態の正確な観察とは、レイを経て十八世紀のギルバート・ホワイトにおいて確立された近代博物誌の主要な課題であるが、ブラウンにあつては、すでにその萌芽が見られると言つてさしつかえない。この一節の記述とその背後に働く精神のありかたは、当然、*「自然」*をつぶさに観察し、その瞬間を捉えようとする試みとつながつてゆく。たとえば「*ノーフォークの博物誌*」からは、次のような箇所を見出すことができる。

私は、おびただしい数のムクドリ (*“Stares or starlings”*) が秋の頃、驚嘆すべきことに、数えきれないほどの大きな群れとなるのを観察したことがある。それは、彼らが夜にねぐらを求めて沼地の安全な場所であるアシヤハンノキにとまったときのことだ。私はそれを観察するため、日没どきに沼地へ赴いた。そして、彼らがいつものねぐらとする場所の傍らで立っているうちに、非常に多くの群れが四方から飛んでくるのを観察することができた。鳥たちは一時間もしないうちに戻つてきて、ごく狭い範囲に落ち着いたのだが、その数ははなはだしいものだった。(3:409)

視線を介して対象に肉薄し、生態の実相に迫るといふ行為からすれば、この一節におけるブラウンの*「所見」*は、近代博物誌の基本文法の重要な一端を方向づけたものではなかつたらうか。しかも、*「見る主体」*と*「見られる客体」*との分離が明確に認識されている以上、すでにブラウンにおいて、近代的意味での*「自然」*はまぎれもなく成立していると考えざるをえない。その際に重要な役割を担うのは、言うまでもなく、*“observation”* だったはず

だ。王立協会の意図するところは、ブラウンにおいてもまた、うごめいていたのである。

ブラウン自身、王立協会には属していなかったものの、協会員たちが彼に対して関心を抱き、敬意を払ったことはよく知られている。<sup>20</sup>ここでは、見逃されがちであったレイの言葉を傍証として紹介しておく。『神の叡智』において、レイはブラウンの奇書、万物における五点形の偏在を語る『キュロスの庭園』(The Garden of Cyrus, 1658) に言及しつつ、次のように述べた。

そして注目すべきなのは、多くの葉、花、果実、種子の輪郭と組成において、自然が五辺形ないし五点形という規則正しい形を装うのは驚くべきことであり、ノリッジのトマス・ブラウン卿は五点形に関する彼の言説で、いくつかの例を提示している。また、人々の観察眼が鋭いものでありさえすれば、他の規則正しい形であっても、同様の例が見出されるであろうことは疑いの余地がない。(107)

またしてもレイは、対象としての自然を検証する際の適切な手法である“observation”の意義を指摘せずにはいられない。そして、その範をブラウンのうちに求めたのである。近代博物誌の黎明期という時代において、ブラウンが「自然に関する知識」の領域に確たる足跡を残したことを伝える挿話にちがいない。<sup>21</sup>

十七世紀中葉にあつては、こうして、さまざまな人物や団体が自然・自然現象を解明することに情熱を注いでいた。その際、“observation”という手法が定着してゆくにつれ、この言葉を用いれば、それだけで、ある見解の合理性ないし真実性が保証されると思ひ込んでしまう事態もなかったわけではないと推測される。だが、その一方で、ある“observation”が他の“observation”と較べて精緻なのか粗雑なのかといった検証も可能になってくる。すなわち、複数の“observation”を相対化し、比較検討することで、自然の実態に接近するとともに誤謬を排除する。

そして、さらなる信頼度を高めてゆくために“observation”を洗練させてゆく。『伝染性謬見』をも含めたブラウンの膨大な記録群は、こうした科学的精神の根幹に関わる点から評価されなければならない。王立協会の志向するところと同調しつつ、それを支えた時代の着実な歩みを直接的にであれ間接的にであれ浮き彫りにしているからである。<sup>22</sup>

## 結びとして

これまで見てきたように、十七世紀のイギリスにおいて“observation”という行為が明確な意義と機能を担ういたり、また、それと呼応ながら、ごく日常的な意味と了解されるような“nature”が構築されてゆく。すなわち、ひとつの言葉が新たな意味を獲得するには、背景として、それをめぐる動的な状況が存在しているのである。言葉と概念がまぎれもなく文化の所産であり、かつ文化それ自体を表象することは、ここからも明らかになってくるし、同時に、私たちにも多くの課題を投げかけているようにも思われる。

たとえば今日、環境思想のみにとどまらず、さまざまな領域で、〈人間と自然〉との関係の再考と再構築がしきりに論じられている。しかしながら私たち自身の言説をふりかえったとき、私たちが欧米の人々が十七世紀に確立させた認識とまったく同一の視座から〈自然〉を捉えている、すなわ、主体としての人間と客体としての自然という二分法に完全に立脚している、と断言できるだろうか。あるいは、その視点が正しい判断基準であると自信をもって断言できるだろうか。そもそも、私たちの語彙に〈自然〉が組み込まれ、〈自然〉<sup>じねん</sup>に由来するへしぜんという読みかたが採用されてから、わずか百年ほどしか経過していないのだ。また、〈人間〉にしても事情はまったく変わらない。概念としての〈人間〉があることは否定しえないが、その一方で、現実の〈人間〉は、ひとつの場所、社会、文化のうちに生きる個人として存在し、それぞれが固有のやりかたで〈自然〉と関わって

いる。だとすれば、ひとりひとりの人間と自然との関係は単一の価値観・価値基準に基づいて、あるいは欧米主導のいわゆるグローバルな視点からのみ検証されるものでは決してありえない。したがって、かりに「人間と自然との関係」という言説を受け容れるにしても、ローカルな存在としての「人間」とローカルな「自然」との間に展開されている多様な関係を考慮しない限り、議論が実体をともなう可能性は限りなく少ない。さまざまな環境言説が「人間と自然」との関係に焦点をあてながら、やっかいな問題を抱え込んでしまっている事態は、多くの場合、ひとえにこの点に起因するのではないか。

「自然」がそうであるように、言葉、そして文化もローカルなものとして誕生し、立ち現われてくる。それを十分に認識するときにはじめて、私たちは異文化を理解する第一歩を踏み出してゆく。また、この過程を踏まえない限り、相互の誤解や言葉の浪費が繰り返されてゆく。本稿では、ある時代において、ひとつの言葉が新たな意味を獲得する現場、そのひとつの事例を王立協会とサー・トマス・ブラウンの活動のうちにたどったつもりである。

註

- 1 本稿は、十七世紀英文学会東北支部例会（二〇〇三年九月）における報告内容に大幅な加筆訂正を施したものである。
- 2 OED, nature, 13を参照。ちなみに、初出例は一六六二年となっている。なお、形容詞“natural”の場合、十六世紀のうちに「自然界」に関わる用法が成立している。
- 3 Hunter, 29.
- 4 Spat, 64.なお、『王立協会史』を含め、引用する主要な著作の該当箇所は、本文中にカッコを付して表記する。その際、数字は引用文献のページ数、もしくは巻数およびページ数を表わしている。



5 Bacon, 356. なお、『学問の進歩』(Advancement of Learning)の刊行は一六〇五年である。

6 十七世紀英文学会編『十七世紀のイギリスの生活と文化』(金星堂、一九九七年)所収の拙論「サー・トマス・ブラウンの博物誌―『伝染性謬見』断章―」を参照されたい。

7 Hobbes, 540-1.

8 Dryden, 32-3.

9 王政復古期の著名なリベルタン詩人、ロチェスター伯爵ジョン・ウイルモットは代表作「風刺」において、理性的であることを誇る人間の傲慢さを嘲笑し、「理性」こそ“ignis fatuus”である」と断罪した。逆説的ながら、この事実は“ignis fatuus”の意義が広く浸透しており、トポスとして確立していたことを裏づけている。

10 OED, observation. この語義説明に「科学的に」(“scientifically”)という言葉が含まれているのは興味深い。

11 Birch, 1: 477.

12 レイは王立協会員であると同時に、種の概念の提唱などにおいて、イギリスはもとより、ヨーロッパにおける近代博物誌研究に多大な貢献をはたした人物だった。

13 レイはこの直後に、次のような注目すべき発言を行なっている。「新たな研究が出発点においてはきわめて茫漠としていて、複雑かつ困難であることは承知している。だが、若干の決意をもってことを進めた後には、また、こう言ってさしつかえないのだろうか、人間がその研究にいくぶん精通した後には、彼の理解力は澄みわたり、拡大されるし、困難は消滅し、事態は容易かつ親しいものとなる」(173)。

14 「神の叡智」は「詩篇」一〇四・二四にある言葉だが、ブラウンの本書では第一部十三節に四回、十四節に一回、十五節に二回、十六節、十七節に各一回ずつと、集中的に出現してくる。さらに、ベイコンの『学問の進歩』でも二度用いられているし(295, 359)、レイの著書は文字どおりにそれを標題に載っており、「詩篇」の当該箇所を前提とした議論が展開されている。さらに十八世紀、スウェーデンの巨人リンネの『自然の体系』(一七三五年)は初版から最終一〇版にいたるまで、この「詩篇」をエピソードとして掲げている。なお、「神の叡智」に対する王立協会の認識については、Hunter, 28を参照されたい。

15 正式な標題は“Pseudodoxia Epidemica OR ENQUIRIES Into very many Received TENENTS and commonly presumed TRUTHS”である。原義に忠実に従えば、標題を「民衆の間に流布し、伝播される誤謬」とするのがふさわしいことかもしれない。しかしながら、ここでは記載方法・内容も考慮して、「伝染性謬見」としておく。

16 たとえば、Robbins, “Introduction,” xxi-xxxiv は「伝染性謬見」に影響を及ぼした文献、さらには『学問の進歩』との詳細な対

応関係を紹介している。Eamon, 59-66 や上掲の拙稿も参照されたい。

17 「象」に関する伝聞、恣意的解釈、権威の模倣等、事実と根拠薄弱な所見の混在を体現する例としては、エドワード・トプセル『四足獣誌』（一六〇七年）がある。この著作は、十六世紀ドイツの博物学者コンラート・ゲスナーの論考をほぼ英訳したものとみなされるが、ともかく、その記述の多くはプリニウスに由来する。さらに、プリニウスはアリストテレスの所見に大いに依拠しているのである。

18 バロック的と形容されるほどの文体と修辞を駆使した作品群のみに注目してきた読者は、ブラウンが遺した多くの覚え書きに接するとき、あたかも別人の文章といった印象を受けるであろう。王立協会が尊重するという「職人、農民、商人の言葉」(13)と相通じているからである。ブラウンが日常の博物誌研究においてこのような文体を用いたことからまた、へ自然へおよびへ観察へに対する彼の意識が時代精神と通底していたことが理解される。

19 「雌の牙が水平ないし下向きに湾曲する」という記述がそれにあたる。不正確な所見には違いないが、ここからは従来の博物誌から脱却し、新たな視点を構築しようとする時代における、まさに現場の混乱をまのあたりにすることができて興味深い。

20 たとえば、Robbins, "Introduction," xxxix-xix を参照。なお、ブラウンが王立協会に参加しなかった理由の詳細は不明である。直接には、ロンドンとノリッジとの地理的隔たりがあったのかもしれない。ただ、息子エドワードが王立協会員となるにあたり、書簡を通じて繰り返し忠告と支援を与えている事実が物語るように、ブラウンの側が王立協会の意義を認めていたことは明らかである。

21 ブラウン自身、他人宛の書簡中でしばしばレイに言及するなどして、この同時代人の動向に関心を寄せていた。

22 大半の執筆時期が不明ではあるものの、覚え書き類の詳細な(再)検討は今後のブラウン研究のみならず、その時代の博物誌研究の推移を探るためにも欠かせない作業だと思われる。ちなみに、岡田典之はベイコンの著作との関連から、また宮本正秀は王立協会の動向との関連から、それぞれブラウンの営みを丹念に検証していて、好感がもてる。ただ残念ながら、いずれの考察も、その対象を刊行された主要著作に限定している。さらに覚え書きの類をも素材としたならば、より意義深い視座がえられたであろう。

- Bacon, Francis. "Advancement of Learning," *The Works of Francis Bacon*. Eds. James Spedding, et al. Vol. 2. London : Longman, 1859.
- Birch, Thomas. *The History of the Royal Society of London for the Improving of Natural Knowledge*. [1756-7] rpt. 4 vols. Hildesheim : Georg Olms, 1968.
- Browne, Sir Thomas. *The Works of Sir Thomas Browne*, 4 vols. Ed. Geoffrey Keynes. 2nd ed. London : Faber & Faber, 1964.
- \_\_\_\_\_. *Sir Thomas Browne's Pseudodoxia Epidemica*, 2 vols. Ed. Robin Robbins. Oxford : Clarendon P, 1981.
- Dryden, John. *The Poems and Fables of John Dryden*. Ed. James Kinsley. London : Oxford UP, 1958.
- Eamon, William. *Science and the Secrets of Nature : Books of Secrets in Medieval and Early Modern Culture*. Princeton : Princeton UP, 1994.
- Hobbes, Thomas. *Hobbes's Leviathan*. Oxford : Clarendon P, 1909.
- Hunter, Michael. *Science and Society in Restoration England*. [1981] rpt. Aldershot : Gregg Revivals, 1992.
- Marchitello, Howard. *Narrative and Meaning in Early Modern England : Browne's skull and other histories*. Cambridge : Cambridge UP, 1997.
- Partrides, C.A., ed. *Approaches to Sir Thomas Browne*. Columbia : U of Missouri P, 1982.
- Ravin, Charles. *English Naturalists from Neckam to Ray*. Cambridge : Cambridge UP, 1947.
- Ray, John. *The Wisdom of God Manifested in the Works of the Creation*. [1691] rpt. New York : Arno P, 1970.
- Sprat, Thomas. *The History of the Royal Society of London for the Improving of Natural Knowledge*. [1667] rpt. London : Routledge & Kegan Paul, 1959.
- Thomas, Keith. *Man and the Natural World : A History of Modern Sensibility*. New York : Pantheon Books, 1983.
- Topsell, Edward, "The Historie of Foure-Fotted Beastes," *The Elizabethan Zoo : A Book of Beasts Both Fabulous and Authentic*. London : Frederick Eichel's & Hugh Macdonald, 1929.
- 岡田典之「サー・トマス・ブラウンの『俗信論』」中岡他編『楽しむイギリス文学—その栄光と現実—』金星堂（二〇〇二年）、二九—四一ページ。
- 宮本正秀「トマス・ブラウンと実験科学の時代—『伝染性謬見』第一巻を中心にして—」『オベロン三〇—（二〇〇二年）』、六八—八四ページ。